

図書購入費 1 千万も削減

「書架がいっぱいになったから」と

鈴鹿市の新年度予算で、図書館の図書購入費がいきなり1千万円もへらされて2千万円にされました。今の図書館ができた1981年から20年余、図書購入費は最初の1800万円から徐々に増やされてきて、最近では毎年3千万円台で推移してきました。それがいきなり、3分の1も削るとは前代未聞です。

3月15日の本会議で私は、「こんな大幅な削減はゆるされない」とただしましたが、文化振興部長の答弁は、「毎年新しい図書を入れてきたので、書架も書庫もいっぱいになったから」という、珍妙なものでした。毎年新たに出版される膨大な数の図書から、予算の範囲内で買いそろえて市民に提供するのが、図書館の仕事の基本、いつも書架を新しく魅力あるものに保つことは、イロハのイです。いくら書架が満タンでも、古いものばかり並べていては図書館が死んでしまいます。

図書館はその町の文化水準を示す「顔」なのに

市民に見える「開架」スペースに、新たに本を入れる分だけ古い本を引いて書庫に入れる、書庫が一杯になれば、増設するか古い本を廃棄することになります。そのように常に本の配架を変えていくことが必要です。市役所の書類でも「3年保存」「5年保存」などのルールで廃棄処分をすすめますが、それと同じです。「棚が一杯になったから、買うのを控える」では、本末転倒です。

また私は、図書購入費の財源のうち1千4百万円が「宝くじ協会」からの助成金であることを指摘し、「市の持ち出す一般財源は、わずか6百万円にすぎないではないか。こんな所を切り捨てようとするのは、20万都市として恥ずかしいことだ」と、予算の復活を強く求めました。

移動図書館車は、まだ十分使える

市は移動図書館を廃止しようとしていますが、その大きな理由を「11月からNOX・PM法の排ガス規制にかかるので、車が使用できなくなるから」としています。しかし、方法はあるのです。

13日の本会議一般質問で私は、「ディーゼル車の排気ガスを規制値以下にする装置＝DBSを取り付ければ、車検も通り、引き続いて使用できる」こと、鈴鹿の移動図書館車「三菱4D33」型は適合するとのデータを紹介して、「やめることばかり考えずに、どうすれば続けられるかに知恵をしぼる努力」を求めました。文化振興部長は「まだしばらく時間があるので検討したい」と答えました。車は14年も使っていますが、手入れもよく走行距離はまだ5万キロ余り、十分にこれからも使えます。これをスクラップにするなどとは、実に「もったいない」ことです。

こんな安値できちんと調査できるの？

[神戸中・平田野中移転事業PFI導入可能性調査業務]

予定価格 860万円 落札価格 190万円 落札比率 22.1%

[不燃物リサイクルセンター2期事業建設基本計画業務]

予定価格 1198万円 落札価格 193万円 落札比率 16.1%

この2事業の調査業務は、民間コンサルタントとの契約で進めていて、この3月末に成果品（調査結果）が納入されます。しかし、予定価格の5分の1、6分の1という入札結果は誰が見ても安すぎて、きちんと調査ができるのか、調査結果は信頼できるのか、とても疑問です。

中学校移転は総事業費60億円、リサイクルセンター2期事業は100億円という、新庁舎建設後の鈴鹿市の2大プロジェクトで、その一番最初の基本的な調査が、ただ「安ければ良い」で進められることには不安を感じます。

本会議一般質問で私は、「これは民間に事業全てをお任せする『PFI』ありきとの筋書きがあるのではないかと、率直な疑問を出しました。市側の答弁は、「低価格であっても、きちんと仕事はしてもらおう」というものでしたが、その是非は調査結果の報告や、その後の事業の動きをみて判断するしかありません。注目していきたいと思います。

「弓矢裁判」2審も弓矢先生の勝訴に

3月20日、名古屋高裁でうれしい判決が出されました。この裁判は、松阪商業高校の教師だった弓矢伸一氏が、居住地での発言を「差別発言」だとして、それから半年にわたって部落解放同盟、一体となった三重県教委につるし上げられ、そのエスカレートの中で当時の校長先生が自殺という最悪の事態となった、99年の事件の真相を問うてきた裁判です。

高裁判決は、津地裁で出された「慰謝料220万円」を、さらに県教委の違法行為をみとめて「330万円」としました。反省文の強要、それを地域に配布する、糾弾会への出席強要など、弓矢先生のプライバシーや人権をずたずたにした県教委の異常な姿勢に、ふたたび審判が下ったのです。

県教委はこの判決に反省することなく、ただちに最高裁への上告を決めましたが、まったく恥の上塗りとしが言えない異常な態度です。

「部落差別」の大看板、撤去せよ

鈴鹿市の行政・教育も、県当局や県教委の「同和特別扱い」の影響下にあり、いまだに市としてのけじめがはっきり付けられずにいます。

その象徴的なものが、市庁舎前・立体駐車場からの通路横に立てられている「部落差別をなくそう」の大看板です。私は生活産業委員会での質疑や、本会議での討論の中で、「こんな間違っただスローガンの看板は撤去せよ」と要求しました。鈴鹿市は30年以上も部落問題・同和問題の解決に取り組み、行政としての仕事はすべて達成しました。また国の特別法もすでに役目を終えて失効し、法に基づいて指定・線引きされた「同和地区」という特別な地域も無くなりました。もう鈴鹿市には「部落差別」はないのです。それなのに「部落差別をなくそう」などというスローガンをいまだに大きく出しているのは、これまでの行政と市民が進めてきた成果を自己否定するものです。

市の担当者は「鈴鹿市は、まだ部落差別はあるという認識に立っている」として、撤去を拒否しました。私は「あの看板を立てておくのなら、『部落差別は無くなりました』と書くべきだ」と、重ねて撤去を求めました。

15分カットで不自由に この3月議会から「対面式・一問一答方式」と同時に、質問時間が60分から45分に減らされました。実際にやってみて、議論の詰めができない不自由さを痛感しました。60分に戻すよう求めます。

ずいそう

「力道山」のいた時代

私の子ども時代、はじめて家にテレビが入ったのは、たしか1960年（昭和35年）だった。そしてテレビの「プロレス中継」に熱中した。あの時代は「力道山」が国民的ヒーローで、力道山ら日本人レスラーが外人と対決し勝つことを、子どもも大人もみんなて懸命に応援した。力道山は、敗戦から復興にむけて歩みだした日本人の「希望」を背負ってがんばっていた。

民族のはざままで苦悩し、たたかい抜いた人生

今上映されている映画「力道山」は、朝鮮の出身でありながら「日本人」としてヒーローとなり、39歳で忽然と去った人物を、韓国の監督ソン・ヘソンが新たな視点から描いた作品である。主人公も韓国の俳優ソル・ギョングが、往年の力道山そのままの姿で熱演していて、「朝鮮人」であり「日本人」でもある矛盾と苦悩を、その体全体でうったえている。

力道山はいまの北朝鮮で生まれ、戦前に日本に移り長崎で日本人農家の養子となって「金信洛」から「百田光浩」となる。恵まれた体を生かして相撲界に入り、49年に関脇まで昇進、大関も確実といわれたが、当時は生粋の「日本人」でないと横綱にはなれないと知り、50年廃業。アメリカに渡りプロレス修業を重ね、帰国後53年に日本プロレス協会を立ち上げ、「空手チョップ」で外人レスラーを倒す痛快さでたちまちヒーローとなる。

映画ではその成功者の「陰」の面をクローズアップし、民族差別に打ち勝つためにも常に強くあらねばならない、一度でも負けることは許されないと自らを追い詰め苦悩する「人間・力道山」を描く。

いま相撲界は、外国人の横綱や大関でもっているほどの国際色である。また、韓国のスターが日本人よりも人気があったり、日韓双方の交流もどんどん進み、力道山の時代とはまったくちがひ、強固に見えた差別の「壁」もほとんど消えつつある。もし力道山が今の時代に生まれていたら、堂々たる横綱になっていただろう。

日本はアジアの一員であり、とくにお隣りである中国や韓国との仲良い関係は大事である。そこに再び「壁」を作るような、近ごろの偏狭な政治的・思想的逆流は、早急に克服しなければならないと思う。